岡山県立大学保健福祉学部紀要　第28巻１号2021年　１～９頁　http://doi.org/10.15009/00002392

「高齢者の生活を支える看護」の概念分析

荒井葉子*　實金栄**　名越恵美**

要旨：本研究の目的は、「高齢者の生活を支える看護」について概念を明らかにし、看護の活用性を検討することである。Walker & Avant の概念分析方法を用い分析した。概念の属性は【尊厳を持って生きられるよう寄り添う】、【日常生活が行えるように整える】、【その人にあった疾病予防・病気の回復を支援する】、【安全で快適な環境を提供する】、【支援体制づくりを調節する】が抽出された。先行要件は、【その人と家族の今までの人生を尊重する姿勢を持つ】、【その人を理解する】、【身体機能を整える】、【安心感をもたらすよう関わる】、【多職種で協働する】が、帰結は、【自立した日常生活が獲得できる】、【状態が回復する】、【生活を維持できる】、【QOL が向上する】、【その人らしい死を迎える】が抽出された。本概念は、病院、在宅、介護施設等看護職が働く様々な場で活用が可能であり、高齢者が自分らしい生活を人生の最期まで続けることに寄与できると考える。

キーワード：高齢者、生活を支える看護、概念分析

Ⅰ．はじめに

我が国の高齢化率は 28.8％であり、今後総人口は減少していく傾向にあるが、高齢化率はますます増加することが見込まれている（内閣府 2021）。疾病構造が変化するとともに、高齢化によって複数の慢性疾患を抱えながら地域で暮らす人が増加している。そのため 2025 年度にむけて効率的かつ質の高い医療提供体制の構築として医療の機能分化が推進され、同時に地域包括ケアシステムの構築が急務の課題であった（厚生労働省、2015）。現在、医療の機能分化や地域包括システムは、構築されつつあり、今後は各機能の質の向上が求められている。日本看護協会（2015）は、2025 年に向けた看護の挑戦、看護の将来ビジョンにおいて、「健康・医療と生活、両方の視点を持った看護職には、多様な場で役割を発揮することが求められる」と記している。看護師は、医学に基づく治療に加えて、人々を生活者として捉え高齢者の生活を支える看護実践能力が求められている。しかし、「高齢者の生活を支える看護」の用語は多くの場で使われているが、概念が曖昧なまま用いられていることが多く、「高齢者の生活を支える看護」について具体的に述べられていない。そこで、本研究は、「高齢者の生活を支える看護」について概念を明らかにし、看護の活用性を検討することを目的とする。

Ⅱ．方法

１．研究方法

曖昧なまま広まっている概念を明確に定義することに役立つ Walker & Avant が提唱する概念分析の方法（中木ら訳、2017）を用いた。この概念分析は、概念の基礎となる要素を調べる過程である。概念の内部構造を明らかにすることができ、曖昧な用語を洗練することで測定用具の開発を促進することができる。本研究では、Walker & Avant の手法に基づき①概念を選択する、②分析のねらい・目的を決定する、③概念について発見したすべての用法を明らかにする、④概念を定義づける属性を明らかにする、⑤先行要件と帰結を明らかにする、という５つの手法に着目し概念分析を行った。まず、分析する概念を「高齢者の生活を支える看護」とし、概念の用法を明らかにするために、言語辞典、社会学辞典など辞書、定義が記されている文献を用いて「生活」「生活を支える看護」の概念の用法を概観した。

* 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科 博士後期課程保健福祉科学専攻
** 岡山県立大学保健福祉学部看護学科

次に、各文献を「高齢者の生活を支える看護」の用語に注目し、用語の前後の文脈を精読した。文献ごとに概念を定義づける属性、先行要件、帰結に関する記述について、データシートを作成して整理し、質的分析を行った。分析過程では、質的研究および老年看護の専門家よりスーパーバイズを受け妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮として、分析対象文献を引用した場合は、出典・著者が分かるように明記し、巻末には論文で使用した文献について表記を行った。引用する場合には、自分の考えと混同し著者の意図から逸脱しないようにした。

２．データ源と選択

本稿では、言語辞典、生活を支える看護に関する書籍、研究論文をもとに分析をおこなった。研究論文については、医学中央雑誌を用いて「高齢者」「生活を支える」「看護」をキーワードに、収載誌発行年数制限をせず検索した結果、原著論文は81件抽出された。当該論文の抄録を参照し「高齢者の生活を支える看護」に関する内容が記載されている文献を抽出した。さらに検索により抽出された文献の引用文献等からハンドサーチをかけ、同時に関連する書籍も分析対象とした。海外論文に関してはPubMed 、Science Directを使用し、nurse OR nursing AND “supporting the life ”OR“supporting the lives ” AND “older people” OR “elderly people” と検索すると多数であったため過去10年に絞ったところ1957件であった。タイトル・abstractを見たところ、転倒予防、フレイル、疾患・治療、せん妄、高齢化からの身体変化、虐待等の内容であり「高齢者の生活を支える看護」に関する内容が記載されている文献はなかった。「高齢者の生活を支える看護」に関しては日本的文化背景の影響に関係していると考え、国内文献を対象とした。本稿は、最終的に国内文献24件、辞書５冊、書籍２冊、報告書等２件の33件を分析対象とした。

Ⅲ．結果

１．概念の用いられ方

１）辞典による「生活」の概念の用いられ方

言語学辞典によると「生活」は、「生存して活動すること。世の中・社会生活の中で暮らしてゆくこと。また、そのてだて。生計のありかた（新村ら編，2018；北原ら編，2010）。」と記されていた。新社会学辞典によると「生活」は、「①生命、いのち、生存、②生計、暮らし、暮らしむき、③人生、生涯、生き方、生きざま、という３重の構造を持っている。それはたえざる生命の維持、更新の過程から、自己実現、生きがいといった高次の人間的諸活動を含む無数で多様な活動（行為）の束として成立している（森岡ら編，1993）。」と記されていた。介護福祉学事典によると「生活」とは、「衣食住が充実し、生命を維持していくだけでなく、家庭、地域、学校や職場等での生活を介して、生きることの意義を見出していくことである（井上ら編，2014）。」と記されていた。看護学大辞典における「生活」とは、「生命の維持存続とそれを高めていく営みをいう。そのためには何よりも物の消費と、その前提としての物の生産が必要であり、この観点からすると生活とは物の生産と消費をめぐっての活動であるといえる（永井ら監，2013）。」と記されていた。

２）「生活」の概念の用いられ方

川島（1997）や小玉（2016）は「生活とは広い概念であり、看護における『生活行動』を意味している。」と述べていた。患者教育の視点から河口ら（2003）は、「生活」の概念規定を以下のように示した。「看護の立場で看護が捉える生活とは、人間の存在そのものであり、各個人の主体的営みである。生活には、①生命、生存、②生活習慣、社会的活動、生計、暮らしむき、③価値観、信条、生き方の側面がある。看護職は、対象者との相互作用の中で『その人の生活そのものの事実』と『その人にとっての意味』を健康との関連からとらえる。」と定義した。また、生活習慣病の病気の体験から、野並（2006）は、「生活を単独に取り上げると、食事とか睡眠ということしか上がらない。身体の体験というところとつながらないと生活は見えてこない。看護の切り口で生活を捉えるならば、心身統合体としての身体の体験に注目する必要がある。」と述べていた。日本看護科学学会第13･14期看護学学術用語検討委員会報告書（2019）において、「生活（Life）とは、人間の生存そのものである。人間の生存を成り立たせている個体の営みは大きく分けて①生命活動（life activities）②日常生活（行動）（daily living）③暮らし（life style：生活様式）の３つから捉えられる。」と、生活を３つに分類していた。

3)「生活を支える看護」の概念の用いられ方

小玉（2016）は、「生活を支えるは正確には“その人”の生活行動を助けるというべきだ。」と述べた。日本看護科学学会第13･14期看護学学術用語検討委員会報告書（2019）では、「看護は人々の日常生活にかかわり、その人が健康状態を回復、増進し、その人の望む暮らしができるように援助する。つまり看護の独自性はどのような健康状態にある人においても、生活を幅広い視点から総合的に捉え、安全、安楽にその人らしく尊厳をもって生きられるよう日常生活を中心とした援助を行う点にある。」と定義していた。

2．概念を定義づける属性（表 1，図 1）

5つの属性【尊厳をもって生きられるように寄り添う】、【日常生活が行えるように整える】、【その人に合った疾病予防・病気の回復を支援する】、【安全で快適な環境を提供する】、【支援体制づくりを調整

表 1　高齢者の生活を支える看護の属性

属性	文献
【尊厳をもって生きられるよう寄り添う】	
・その人を慮り精神的に支える	原田ら, 2019.　小沢, 2010. 押領司ら, 2008.
・一人の人としてその人らしくを尊重した支援をする	吉元ら, 2019.　田中ら, 2017. 杉本ら, 2017. 藤野ら, 2014.
・その人の思いに寄り添う	笹谷ら, 2017. 井上ら, 2002.
・意思決定できるように支援する	原田ら, 2019.　阿川ら, 2019 笹谷ら, 2017. 田中ら, 2017.
・家族とともに今後の方向性を考える	原田ら, 2019. 阿川ら, 2019.
【日常生活が行えるように整える】	
・毎日の生活で生じた基本的ニーズを満たす	杉本ら, 2017. 笹谷ら, 2017. 田中ら, 2017. 森川ら, 2003.
・自立した生活行動獲得に向けて支援する	山口ら, 2019. 原田ら, 2019. 笹谷ら, 2017.
・これまでの生活習慣を大事にし取り入れる	鈴木ら, 2019. 笹谷ら, 2019. 田中ら, 2017 藤野ら, 2014
【その人に合った疾病予防・病気の回復を支援する】	
・状態に合わせたケアを行う	笹谷ら, 2019. 山口ら, 2019. 原田ら, 2019. 田中ら, 2017. 杉本ら 2017.
・疾病や日常生活に関する知識の提供をする	作山ら, 2019. 堀之内ら, 2019. 杉本ら, 2017. 押領司ら, 2008.
・起こりうる症状の発症・進展予防をする	鈴木ら, 2019. 笹谷ら, 2019. 堀之内ら, 2019. 原田ら, 2019. 杉本ら, 2017. 小沢, 2010.
・幅広い視点から総合的に状態を捉える	笹谷ら, 2019. 田中ら, 2017. 杉本ら, 2017. 天木ら, 2014. 森川ら, 2003.
・楽しみを尊重した健康管理を支援する	笹谷ら, 2019. 杉本ら, 2017. 笹谷ら, 2017. 小沢, 2010.
・多職種チームで状態を共有しケアに活かす	鈴木ら, 2019. 藤野ら 2014.
・他職種からの情報を看護に活かす	田中ら, 2017. 杉本ら, 2017.
・代弁者となり状態を他職種へつなぐ	原田ら, 2019. 杉本ら, 2017.
【安全で快適な環境を提供する】	
・快適な環境を整える	鈴木ら, 2019. 笹谷ら, 2019. 山口ら, 2019. 田中ら, 2017. 杉本ら, 2017. 梶原ら, 1992.
・安全な環境を整える	鈴木ら 2019. 藤野ら, 2014.
・家族が安心しともに支えることができるように関わる	鈴木ら, 2019. 笹谷ら, 2019. 原田ら, 2019. 杉本ら, 2017. 藤野ら, 2014. 梶原ら, 1992.
【支援体制づくりを調節する】	
・看護の限界を把握し他職種と調整する	小沢, 2010.
・社会制度につなげる	押領司ら, 2008.
・状態に合わせたケアを統一する	原田ら, 2019. 杉本ら, 2017.
・医療職の立場で支援する	笹谷ら, 2017.

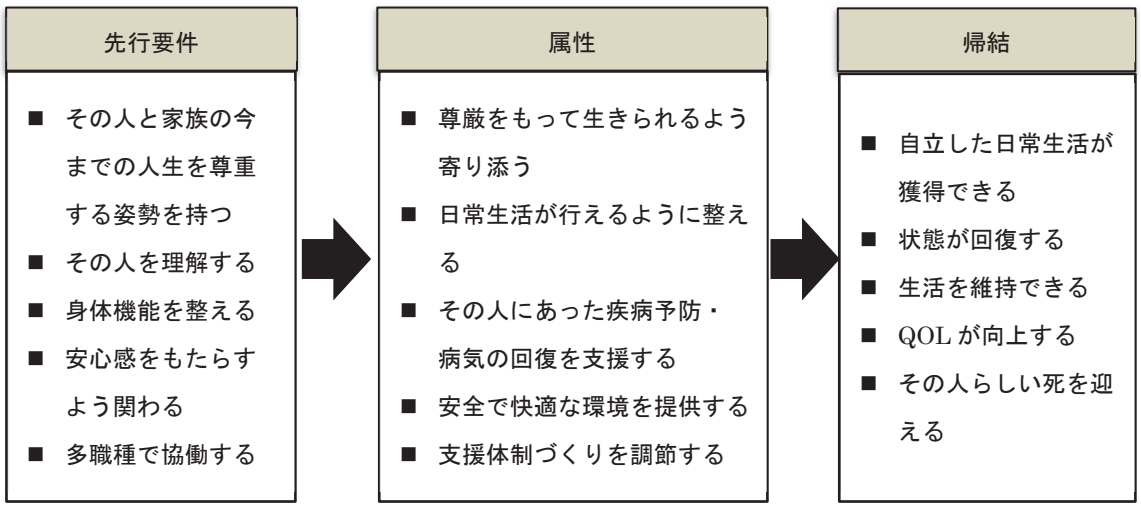

図１　高齢者の生活を支える看護の先行要件・属性・帰結の関連図

する】が抽出された。

【尊厳をもって生きられるよう寄り添う】という属性は、〈その人を慮り精神的に支える〉、〈一人の人としてその人らしくを尊重した支援をする〉、〈その人の思いに寄り添う〉、〈意思決定できるように支援する〉、〈家族とともに今後の方向性を考える〉の５つのサブカテゴリから構成された。この属性には、対象の希望を失わせないように、一人の人として本人・家族の意思を尊重し、支える内容が含まれていた。

【日常生活が行えるように整える】という属性は、〈毎日の生活で生じた基本的ニーズを満たす〉、〈自立した生活行動獲得に向けて支援する〉、〈これまでの生活習慣を大事にし取り入れる〉の３つのサブカテゴリより構成された。この属性には、人生の最終段階にある人に対して食べるケアや心地よさを提供するケアが含まれていた。

【その人に合った疾患予防・病気の回復を支援する】という属性は〈状態に合わせたケアを行う〉、〈疾患や日常生活に関する知識を提供する〉、〈起こりうる症状の発症・進展予防をする〉、〈幅広い視点から総合的に捉える〉、〈楽しみを尊重した健康管理を支援する〉、〈多職種チームで状態を共有しケアに活かす〉、〈他職種からの情報を看護に活かす〉、〈代弁者となり状態を他職種へつなぐ〉の８つのサブカテゴリより構成された。この属性には、起こりうる症状の予測的観点からの支援や本人・家族のこれまでの生活や楽しみを考えた健康管理を一緒に考えていく支援が含まれた。疾病予防・病気の回復のために多職種で取り組み支える内容も含まれていた。

【安全で快適な環境を提供する】という属性は、〈快適な環境を整える〉、〈安全な環境を整える〉、〈家族が安心しともに支えることができるように関わる〉の３つのサブカテゴリより構成された。この属性には、高齢者の家族を環境ととらえ、心地よい環境や普段の生活を取り入れた環境の提供が含まれていた。

【支援体制づくりを調整する】という属性は、〈看護の限界を把握し他職種と調整する〉、〈社会制度につなげる〉、〈状態に合わせたケアを統一する〉、〈医療者の立場で支援する〉の４つのサブカテゴリより構成された。対象の人の経済状況も考えたうえで周囲の人的資源を調整し、看護が直接支援するのではなく調整するといった内容が含まれていた。

３．先行要件と帰結

１）先行要件

高齢者の生活を支える看護の発生に先立つこととして、対象文献より【その人と家族の今までの人生を尊重する姿勢を持つ】、【その人を理解する】、【身体機能を整える】、【安心感をもたらすよう関わる】、【多職種で協働する】の５つが抽出された。

【その人と家族の今までの人生を尊重する姿勢を持つ】では、人生の終焉をその人らしく人間らしくを大事にする（杉本ら，2017）が含まれていた。【その人を理解する】では、患者の歴史を振り返り、患者の大切にしている思いを理解する（伊吹ら，2018）が含まれていた。【身体機能を整える】では、鎮痛剤使用と休息による疼痛・疲労緩和（原田ら，2019）が含まれていた。【安心感をもたらすよ

う関わる】では、そばにいるだけで安心してもらえるような対応方法を知る（笹谷ら，2019）が含まれていた。【多職種で協働する】では、早期に主治医や認知症ケアチームに相談し、チーム間で情報共有を図り、対応を検討することが非常に重要である（鈴木ら，2019）が含まれていた。

2）帰結

高齢者の生活を支える看護が発生した結果として生じることとして、【自立した日常生活が獲得できる】、【状態が回復する】、【生活が維持できる】、【QOL が向上する】、【その人らしい死を迎える】の5つが抽出された。【自立した日常生活が獲得できる】は、自身の尊厳を保ち健康管理を主体的に行うことができる（金子，2011）が含まれていた。【状態が回復する】は、心身や社会的な回復を促すことができた（原田ら，2019）が含まれていた。【生活が維持できる】は、その人らしく在宅生活を継続できる（伊吹ら，2018）が含まれていた。【QOL が向上する】は、QOL を支える（山口ら，2019）が含まれていた。【その人らしい死を迎える】は、その人らしい死を支える（藤野ら，2014）が含まれていた。

Ⅳ．考察

1．概念の特徴

生活とは幅広い概念であり、辞書においては生命維持、生きていく活動、暮らし、生きざまといった内容やまたそれを高めていくといった高次な人間の諸活動が抽出された。看護における生活の捉え方では、その人の生きてきた歴史を重んじ、看護職者と対象者の相互作用の中でその人の身体や健康を通して生活そのものの事実やその人にとっての意味や経験などから「生活」を捉える必要性が示されていた（河口，2003；野並，2006）。

看護職の倫理綱領（日本看護協会，2021）前文では、「看護の使命は人々が人間としての尊厳を保持し、健康で幸福であることを願っている。このような人間の普遍的なニーズに応え、人々の生涯にわたり健康な生活の実現に貢献することである」と示している。本研究では、その人を慮り、その人らしくを尊重して、意思決定に寄り添い支援していくことから【尊厳をもって生きられるよう寄り添う】が抽出され、寄り添うために、先行要件である【その人と家族の今までの人生を尊重する姿勢を持つ】、【その人を理解する】といった看護師自身の対象者と向き合う姿勢が重要と考えられた。

日本看護科学学会第13・14期看護学学術用語検討委員会報告書（2019）では「日常生活とは、人間が日々の生活の中で生じた基本的ニーズを満たす行為であり、生命を維持し、生活の質を高め、尊厳を保つために不可欠なものである」と定義している。Caroline（2021）は、患者の自己管理支援に関して、従来の教育的スタイルから患者の個別のニーズに焦点を当てたコーチングスタイルを用いて、患者との協力関係やパートナーシップを築くことを示している。本研究でも、対象者の毎日の生活で生じた基本的ニーズを満たすことや自己管理支援も重要であり、また、共に寄り添いパートナーシップを築き自立した生活行動に向けて支援することは、【日常生活が行えるように整える】に繋がり重要な支援であると考えられる。

超高齢化社会が進んでいる現在、人々の「健康」についての価値観は変わりつつある。猪飼（2011）は、健康の理解の仕方を「病気が治ることが健康を回復することではなく、病気が治ることで、あるいは治らなくとも適切な対処によって、当事者に健やかな生活がもたらされることが健康になることを意味する」と述べた。笹谷ら（2019）小沢（2010）は、その人らしく生活できるよう疾病との折り合いをつけながら療養方法を調整し、一方では、体調を予測した対応や予防について述べていた。本研究でも、【その人にあった疾患予防・病気の回復を支援する】必要性が示唆されたと考えられる。

六角（2005）は「よい環境は生活者の自立を助け、看護をサポートし、治療効果があるといわれている。それは落ち着く空間、意味の理解、安全な環境・空間、活動できる環境の確保につながり、さらにそのことが高齢者や看護師双方にプラスの効果をもたらすことも期待できる」と述べている。本研究でも、先行要件にある【安心感をもたらすよう関わる】ことで【安全で快適な環境を提供する】ことに繋っていたと考えられる。

チームアプローチの質を向上するためには、互いに他の職種を尊重し、明確な目標に向かってそれぞれの見地から評価を行い、専門的技術を効率良く提供することが重要（厚生労働省，2011）であり、看護師は、チーム医療のキーパーソンとしての役割が期待されている（厚生労働省，2010）。本研究にお

いても、看護師は自らの役割の限界を知ることで他職種へ依頼し共に対象者を支援する（小沢，2010）ことや社会制度につなげる（押領司ら，2008）重要性が示された。高齢者を支えるための先行要件として【多職種で協働する】が抽出され、看護師は、多職種とチームを繋ぐ【支援体制づくりを調整する】ことの必要性が示されたと考える。

２．概念の活用の可能性

保健師助産師看護師法では、看護師とは、傷病者若しくはじよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者と定められている。入院平均在院日数が減少し、患者の入退院が増えている（厚生労働省、2019）。これにより看護は、入退院にかかわる業務が増え、さらに医療処置を優先することによって診療の補助に重点がおかれる。そのため、日常繰り返し行われる生活援助等の療養上の世話は、患者主体ではなく看護師主体でケアを提供する看護業務になっている。竹田（2010）は、「高齢者が人生の最終章を生きる人であるという最大の特徴をふまえた上で、一人の大切な人として高齢者に出会い、その人に関心を寄せ、その人のもてる力を信じ、日常生活を整えること、良き話の聴き手となることが高齢者への看護である」と述べている。高齢者がそれまでおこなってきた日常生活が他者の介助を得ながら行えるまで整えることは、生活を支える看護である。これを看護職が価値の高い看護として捉えることにより、高齢者が自分らしい生活を人生の最期まで続けることに寄与できると考える。そのために、「高齢者の生活を支える看護」の概念を基盤とした看護実践能力を構築することは重要である。本研究における概念は、看護職が働くケアの場である病院（急性期・慢性期・回復期・診療所）、在宅、介護施設等様々な場で活用が可能ではないかと考える。今後、本研究で抽出された概念をもとに、看護職が働く様々な場でその特徴をふまえた「高齢者の生活を支える看護」実践を検証することは、実践力を高めることの一助となり、高齢者が自分らしい生活を人生の最期まで続けることに寄与できると考える。

Ⅴ．結論

本研究において、概念分析の結果を元に「高齢者の生活を支える看護」を「看護職者は、高齢者の尊厳を持って生きられるよう寄り添い、日常生活が行えるよう整え、その人に合った疾病予防・病気の回復を支援しつつ、安全で快適な環境を提供し、支援体制づくりを調整することである」と定義づけることができる。本概念は、看護職が働く様々な場での活用が可能であり、看護師が高齢者の人生における最終章での生活を支える看護実践するうえで適用でき、高齢者の看護実践および研究において有用となると考えられる。

文献

阿川啓子，石垣和子，大湾明美 , 他（2019）．中山間地域における地域文化に根ざした訪問看護師の終末期ケア．文化看護学会誌，11（1）：41-49.

天木伸子，百瀬由美子，松岡広子（2014）．一般病院で入院治療する認知症高齢者への看護実践における認知症看護認定看護師の判断．日本看護研究学会雑誌，37（4）：63-72.

Caroline E.M.,Smit, Jakobus.,Hagedoorn, Ellen I. 他（2021）．Nurses' perceptions of self-management and self-management support of older patients during hospitalization.Geriatric Nursing journal,42（1）：159-166.

原田めぐみ , 奥村美奈子（2019）．回復期リハビリテーション病棟における脳血管障害患者の生活の再構築過程を支える看護のあり方．岐阜県立看護大学紀要，19（1）：41-52.

保健師助産師看護師法（昭和二十三年法律第二〇三号）https://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/04/s0428-7f.html（検索日：2021.10.19）.

堀之内若名 , 榎本麻里 , 高柳千賀子（2019）．整形外科診療所に通院する高齢患者の看護へのニーズ．日本運動器看護学会誌，14：36-44.

藤野あゆみ，百瀬由美子，天木伸子（2014）．介護保険施設で働く看護職の道徳的感受性尺度の開発．日本看護倫理学会誌，6（1）：30-38.

伊吹千春，芳賀美波，籾山愛美，他（2018）．その人らしい生活を支える看護.秋田腎不全研究会誌，21：79-82.

井上歩，佐藤恵子，草野可代子，他（2002）．経皮内視鏡的胃瘻造設術を受けた患者とその家族を支える看護の役割．長崎大学医学部保健学科紀要，15（2）：7-12.

一般社団法人生活を支える看護師の会（2019）．実

践者の語りで理解する「生活を支える看護」. 日本看護協会出版会.
梶原早苗（1992）. 快適な療養生活を支える 老人患者の生き方を大切にする援助. 看護実践の科学, 17（10）：43-48.
金子史代（2011）. 看護師が認識する療養している高齢者のセルフケアとセルフケアに関連する要因. 日本看護研究学会雑誌, 34（1）：181-189.
河口てる子（2003）. 患者教育のための「看護実践モデル」開発の試み　看護師によるとっかかり／手がかり言動とその直感的解釈, 生活と生活者の視点, 教育の理論と技法, そして Professional Learning Climate. 看護研究, 36（3）：177-185.
日本看護科学学会（2019）. 第13･14期看護学学術用語検討委員会 報告書：https://www.jans.or.jp/uploads/files/committee/yougo_houkokusho2019.pdf（検索日：2021.4.16）.
川島みどり（1992）. 快適な療養生活を支える 看護婦の目から見た患者の療養環境. 看護実践の科学, 17（10）：19-28.
北原保雄編 / 著（2010）. 明鏡国語辞典 第二版.
小玉香津子（2016）.「生活行動を助ける」がすべての看護の基本. コミュニティーケア, 18（13）：14-16.
厚生労働省（2019）. 令和元（2019）年医療施設（動態）調査・病院報告の概況. 結果の概要. 病院報告. 令和元（2019）年医療施設（動態）調査・病院報告の概況（検索日：2021.10.19）.
厚生労働省（2015）. 地域医療構想について 平成27年度資料 https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisakukenkouzoushinka/0000094397. pdf（検索日：2021.5.18）.
厚生労働白書（2016）. 平成28年版厚生労働白書―人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える―. 第4章人口高齢化を乗り越える視点第3節地域で安心して自分らしく老いることのできる社会づくり https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/16/dl/1-04_03.pdf（検索日：2021.5.18）.
厚生労働白書（2011）. チーム医療推進のための基本的な考え方と実践的事例集 . チーム医療推進方策検討ワーキンググループ（チーム医療推進会）. https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001ehf7-att/2r9852000001ehgo.pdf.（検索日：2021.8.2）.
厚生労働省（2010）. チーム医療の推進について（チーム医療の推進に関する検討会 報告書）. https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0319-9a.pdf.（検索日：2021.8.2）.
森川千鶴子, 岩江美津子（2003）. 痴呆性高齢者の生活を支える基本的ケアの効果. 看護学統合研究, 5（1）：59-66.
森岡清美 . 他編（1993）. 新社会学辞典. 有斐閣,
永井良三・田村やよひ監修（2013）. 看護学大辞典 第六版. メディカルフレンド社.
内閣府（2021）. 令和3年度版高齢社会白書（概要版）第1章高齢化の状況 .https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf（検索日：2021.8.11）.
日本介護福祉学会事典編纂委員会編（2014）. 介護福祉学事典. ミネルヴァ書房.
日本看護協会（2015）. 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン～いのち・暮らし・尊厳を まもり支える看護～ .https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf（検索日：2021.4.10）.
日本看護協会（2021）. 看護職の倫理綱領 https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf（検索日：2021.8.1）.
新村出編（2018）. 広辞苑, 第7版. ：岩波書店.
野並葉子（2006）. 看護において生活をどう捉えるか―解釈的現象学による生活習慣病者の病気の体験から. 看護研究, 39（5）：409-414.
奥宮暁子編（1995）. シリーズ「生活を支える看護」生活調整を必要とする人の看護 , 1. 中央法規出版 .
押領司民, 佐藤みつ子（2008）. 脊髄小脳変性症療養者の闘病生活に対する思い. 山梨大学看護学会誌, 6（2）：37-43.
小沢久美子（2010）. 後期高齢糖尿病患者の療養生活を支援する訪問看護師のケアの構造化の試み. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 14（2）：147-154.
六角僚子（2005）. その人にとっての環境を考える（シンポジウムII「高齢者の可能性をひきだす看護」, ＜特集＞日本老年看護学会第9回学術集会）. 老年看護学, 9（2）：40-44.
作山美智子, 小笠原喜美代, 安藤莉香（2020）. ひとり暮らし利用者を支える訪問看護師の支援　訪問看護ステーションの調査. 東北文化学園大学看護学科紀要, 9（1）：13-21.
笹谷真由美, 長畑多代（2019）. 特別養護老人ホー

ムにおける看護実践能力尺度の開発 信頼性と妥当性の検討．老年看護学，24（1）：41-49.
笹谷真由美，長畑多代（2017）．特別養護老人ホームにおける看護実践能力の概念分析．大阪府立大学看護学雑誌，23（1）39-49.
杉本知子，森一恵（2017）．終末期にある高齢がん患者に対して看護師が実践している支援の特徴．千葉県立保健医療大学紀要，18（1）：61-68.
鈴木莉佳，守屋麻美，井口実香，他（2019）．入院後に認知機能低下を来した患者への身体抑制解除への試み．静岡赤十字病院研究報，39（1）：64-68.
竹田恵子（2010）．看護学からみた高齢者への健康生活の支援―人生の最終章を生きる高齢者への看護（特集 高齢者医療福祉）．川崎医療福祉学会誌，20:45-55.
田中真佐恵，北村隆子，小野塚元子（2017）．特別養護老人ホームに勤務する看護師の看護実践における生活の視点．日本看護福祉学会誌，23（1）：65-79.
Walker.L.O,Avant.K.C（2005）．中木高夫，川﨑修一訳（2017）．看護における理論構築の方法．第１版 . 医学書院.
山口奈都世，平工淳子，穴井美恵（2019）．看護大学生が捉える高齢者の QOL を支える看護　老年看護学実習Ｉレポートからの分析，中京学院大学看護学部紀要，9（1）：1-12.
吉元梨恵，沖中由美（2019）．BPSD のある認知症高齢者の「心地よさ」に働きかける看護職の支援の特徴．ホスピスケアと在宅ケア，27（1）2-10.

Concept analysis of "nursing to support lives of elderly people"

YOKO ARAI*, SAKAE MIKANE**, MEGUMI NAGOSHI**

*Doctorate Course, Graduate School of Health and Welfare science, Okayama Prefectural University
**Department of Nursing Science, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University,

Abstract： This study aimed to clarify the concept of "nursing to support lives of elderly people" and examine the usability of nursing. The conceptual analysis method described by Walker & Avant was used for the analysis. The following attributes of the concept were extracted: [being there to help them live a life with dignity], [making arrangement for daily living], [supporting prevention of and recovery from illness in a manner that suits each person], [providing a safe and comfortable environment], and [making adjustments in building a support system]. The antecedents identified were: [having an attitude of respecting previous lives of the person and his/her family], [understanding the person], [improving physical functioning], [being involved in a reassuring way], and [collaborating in a multi-professional]. The consequences were: [acquiring independent daily life], [recovering in the condition], [maintaining the life], [improving QOL], and [dying in a way he/she wishes]. This concept can be used in various nursing settings such as hospitals, patients' homes, and long-term care facilities and contribute to nursing to help elderly people live their lives in ways they wish until the final moment.

Keywords： elderly people, nursing to support lives, Concept analysis